

右舷灯



日本船舶海洋工学
会という造船技術者
・研究者でつくる学
会の関西支部から支
部長賞という嬉しい
賞をいただくことに
なった。対象は、筆
者が編集して日本クルーズ&フ
ェリー学会から出版した「日本
の旅客船Ⅰ」と「同Ⅱ」の2冊
の著作で、日本で活躍する
旅客船を網羅的に記録した
地味な本だ。「Ⅰ」では、高
速旅客船270隻余りを、「Ⅱ」
ではクルーズ客船、国際フェリ
ー、中長距離航路のすべての客
船を138隻、カラー写真と要
目表をつけて紹介している。

実は、筆者の最初の著書は45
年前に自費出版した「日本の旅
客船」という本だった。当時、
まだ大学院の学生だったので時
間も結構自由に使える、大学の長
い休みを使って日本中を廻って
内航客船の調査をし、それをま
とめた写真本であった。久しぶ
りに書棚から同本を取り出して
ページをめくってみると、当然
のことながら引退して解体され
た船の姿ばかりだ。しかし、中
には関西汽船の「くれない丸」
のように今でも横浜港でレスト
ラン船として稼働している船も
も2300隻余りの客船が稼働
しているが、とりあえずは、定
期航路で黙々と旅客を運ぶ船に
限ることとしたが、それでもか
なりの数になる。その結果、高
速旅客船と長中距離航路の大型
船をまとめるだけで2年余りが
かかったが2冊の書籍として出
版ができた。

そして、現在は、「日本の旅
客船Ⅲ」としてまとめるべ
く短距離航路客船を追い求
めて、あいかわらず全国を
駆け回っている。海峡を渡るフ
ェリーから、河川の渡し船、離
島への渡海船までその幅は広
い。過疎化によって利用者が減
少して、定期便の廃止の議論が
されている航路も少なくない。

嬉しい受賞

実は、筆者の最初の著書は45
年前に自費出版した「日本の旅
客船」という本だった。当時、
まだ大学院の学生だったので時
間も結構自由に使える、大学の長
い休みを使って日本中を廻って
内航客船の調査をし、それをま
とめた写真本であった。久しぶ
りに書棚から同本を取り出して
ページをめくってみると、当然
のことながら引退して解体され
た船の姿ばかりだ。しかし、中
には関西汽船の「くれない丸」
のように今でも横浜港でレスト
ラン船として稼働している船も
も2300隻余りの客船が稼働
しているが、とりあえずは、定
期航路で黙々と旅客を運ぶ船に
限ることとしたが、それでもか
なりの数になる。その結果、高
速旅客船と長中距離航路の大型
船をまとめるだけで2年余りが
かかったが2冊の書籍として出
版ができた。

そして、現在は、「日本の旅
客船Ⅲ」としてまとめるべ
く短距離航路客船を追い求
めて、あいかわらず全国を
駆け回っている。海峡を渡るフ
ェリーから、河川の渡し船、離
島への渡海船までその幅は広
い。過疎化によって利用者が減
少して、定期便の廃止の議論が
されている航路も少なくない。

そんな切実な声も聴きながら、
旅客船の黙々と働く健全な姿を
記録に残す仕事に没頭してい
る。

(池田良穂)